〈青森県史〉の窓 64

歴史に見る「温泉」⑥
浅虫温泉の風景の今昔

中野渡 一耕
（県民生活文化課 県史編さんグループ 主幹）

現在の浅虫温泉街は海沿いに広がるが、元々の温泉は浅虫川沿いに湧出していた。天明8年（1788）、古川古松軒の「東遊雑記」では「至っての熱湯にて、湯つぼより流れる湯の川々に落ちて、湯気の立ちあがること煙のごとし」とある。同年の、菅江真澄「外ヶ浜づたい」では、「湯は、滝の湯・目の湯・おお湯・はだか湯などで、たいそう清らかに湧き、また家々の後ろにも湯があってよい」「里の中に煮坪という、ふつふつと煮えかえる熱い湯がある。この煮坪で麻を蒸すので『麻蒸』という地名が生まれたという」と記す。村内のあちこちで温泉が湧出し、流れた湯が湯煙を立てる、いかにも温泉地らしい風景が彷彿とされる。

江戸時代後期の浅虫周辺「大日本東山道陸奥州駅路図」
（青森県立図書館蔵）

温泉地としての賑わいも古く、貞享4年（1687）の検地帳では、屋敷地の出湯3カ所、屋敷地以外の出湯3カ所とあり、弘前藩主の湯治地として本陣が置かれていた。庶民の湯治者も多く、元禄元年（1688）の「裸湯は、湯治客が多いが、湯さや（上屋）が無いので不便である。建設用の材木を払い下げて欲しい。そうすれば青森や在所からの入湯客が増え、村の者たちの収益になる」という、代官所宛に申請した記録がある。「はだか湯」の名前は、平成12年にオープンした道の駅の浴場に引き継がれているが、古くは、上屋も無いことから付けられた名称だった。

江戸時代には共同浴場の温泉を引く樋や、湯を溜める桶は村の所有だった。弘化4年（1847）には、大湯の樋が老朽化し、浅虫村単独では修繕できないとして、周辺の村や、青森の町人にも金銭や材木の供出を求めている記録がある（『新青森市史資料編5』）。今でいう「受益者負担」であり、広範囲にわたる人々が協力した。

海沿いの温泉街が発達したのは、明治24年（1891）に東北本線浅虫駅が開業してからのこと。駅前に出来た鉄道会社直営のホテル「東奥館」は、新しい浅虫温泉街のシンボルとなり、やがて、「東北の熱海」と呼ばれるほど活気を呈した。江戸時代前期に7カ所だった源泉は、大正から昭和にかけて掘削が進み、昭和24年には、なんと132カ所にも達した。過度の汲み上げで泉質が悪化したため、昭和41年から集中管理方式となり、温泉枯渇の危機を救った。浅虫温泉は「温泉の集中管理の発祥地」と呼ばれている。しかし、湯煙が立ち上るかつての風景は失われて久しい。現在は浅虫温泉事業協同組合付近に作られた「源泉公園」がその面影を偲ばせる。

さる12月、ついに東北新幹線が全線開業したが、浅虫は新幹線ルートから外れるため、温泉街の人々は危機感を募らせており、今後の取り組みが注目される。東京にお住まいの皆さんも、故郷にお帰りの際は、ぜひ新青森駅から足を伸ばして欲しい。

浅虫の源泉公園
（写真提供:浅虫温泉事業協同組合）